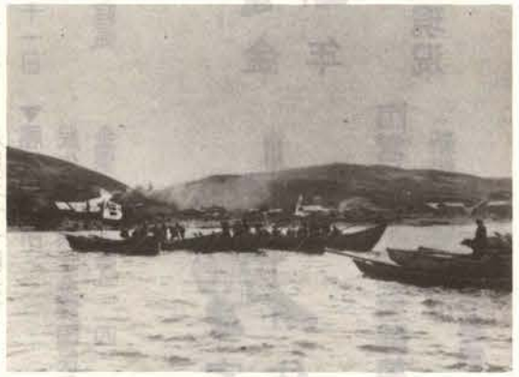
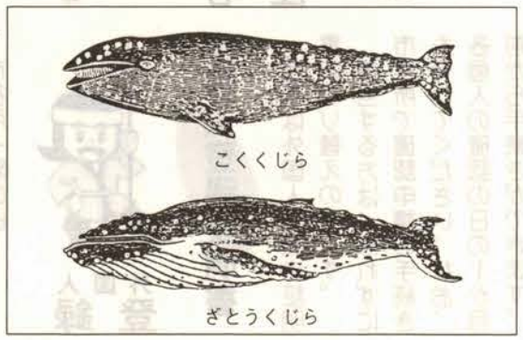
ガンケのこと

福士広志
海のふるさと館学芸係長

「ニシン漁のことを言うと群来の後には必ずガンケが来遊してきてニシンの数の子を食べたものです。ガンケはニシンが群来なければ決してやってきません。その頃ニシン漁も一段落がついて、三泊から小平蘂の川尻へ木廻れ（翌年ニシン粕を炊く木及び家庭用材を漁場に運ぶ）に行く時などは船の前後左右にこのガンケが潮を吹き上げて、恐くて船を進められなかったものでした。後になってガンケの缶詰所ができたりしたこともあります。近頃はニシンの薄漁のため一頭だに見ることができません。その当時、家の中に居てもガンケのゴンゴンという鳴き声がして話ができないほど騒がしかったものです。」

これは昭和十年当時留萌の古老から聞き書きしたものである。ガンケというのはクジラのことで、明治時代にはニシンの来遊と共にクジラがそれを追ってこの近海に出没していた。このクジラの来遊は明治以前からあったことは蝦夷地案内記録の中に特産品として「鯨」が上げられていることからも知ることができる。

では、このクジラはどんな鯨かというとコククジラとザトウクジラという種類である。コククジラは北太平洋に広く分布していたが近年ではめっきり数が減ってしまったという。また、学術的に見ても鯨の仲間のうちでは特異な種類でナガスクジラとセミクジラの中間に位置する。雄は普通十一メートル、雌は十三メートルぐらいで最大十五メートルぐらいに達する。沿岸の浅瀬を回遊し、魚卵、カニ、エビ、ナマコ等を食べる。ザトウクジラはナガスクジラ科に属し、体長十五メートル内外で日本近海では普通に見られたものである。食べ物はオキアミ類のほか小魚である。潮吹きはコククジラで三メートル、ザトウクジラでは六メートルに達するという。



留萌近海では明治年間に旧加賀藩士の斉藤知一により羽幌に捕鯨場が開かれ、明治二十二年三十頭、明治二十三年には四十余頭が捕獲されている。明治二十年に、捕らえた鯨の腹の中には約四石（3トン）のニシンが入っていたというからクジラはニシンの群来をめがけて近海に回遊してきたのは当たり前のことであった。斉藤知一はその後留萌の大和田に斉藤炭鉱を開き、留萌の発展に寄与した人である。